

綱島梁川における見神と批評

古荘 匡義

(和文要旨)

綱島梁川(1873～1907)は宗教思想の基盤を「見神」、すなわち神を感じ神と交流することに置く。しかし彼は、個人我を神や国家に融合すべきだと主張する当時の宗教思想には共鳴せず、神とともに倫理的に行為し働く個人格の重要性を強調する。

本稿は、綱島が明治後期の思潮から距離を取ることができた理由を、綱島が宗教思想において理性的な批評を重視したことと捉え、以下の手順で分析する。まず、「見神の実験」と呼ばれる綱島の決定的な宗教体験以前の宗教思想において、信仰と理性的な批評は互いに独立した活動領域を保持しながらも緊密に連携していることを明らかにする。次に、「見神の実験」以降の彼の思想も信仰や宗教体験に対して批評的な考察を展開したことを示す。

(SUMMARY)

Tsunashima Ryōsen (1873–1907) based his religious thought on seeing God, that is, feeling God and interacting with God. He did not align with the religious thought of his time that claimed that the individual self should be fused into God or the nation. He emphasized the importance of a separate individual personality that acts and works ethically with God.

This paper argues that Tsunashima was able to distance himself from late Meiji era trends of thought by emphasizing rational criticism in his religious thinking. First, we clarify that in his religious thought prior to his decisive religious experience of seeing God, faith and rational criticism were closely intertwined yet maintained their independent spheres of activity. Next, we explain that after the experience of seeing God, his thought comprised a critical reflection on faith and religious experience.

1. はじめに

綱島梁川¹（1873～1907、明治6～40）は、東京専門学校の大西祝のもとで哲学、倫理学を学び、卒業後は文芸批評や倫理学の論考を公表していた。しかし、結核に罹患した後、宗教的な論考を発表するようになる。綱島は1904年7月より、自身にとって決定的な3度の神秘体験を得て、これらの体験についての率直な描写も含んだ論考「予が見神の実験」を1905年5月に発表する。当時、東京帝国大学の哲学科教授、井上哲次郎（1856～1944）などに典型的にみられるように、個人我を非人格的な真如や大我に融解させることを宗教の到達点として捉える傾向があった。「予が見神の実験」の綱島は神との感応を思索のベースとしており、神人合一として神秘体験を捉えてもいたため、当時の宗教思想と軌を一にしているようにみえる。しかし、綱島は神に融解しきれない個人人格の存立も主張しており、神との共在を味わいつつも、各人が神の子として自覚的に行動することが神の自己実現への参入にもなるという形で個人人格を尊重していた。このような発想を最晩年の綱島は「神と偕に楽しみ神と偕に働く」というテーゼで定式化している。

さて、以前の拙稿²で、綱島の宗教論における「個人人格」は当時の国家主義的なイデオロギーにも批判的立場をとりうるものであったのかを問題にした。綱島の理解によれば、根源的な宗教的要求の末に体験され獲得された宗教的な事実は理性的に批判しえないものであるため、仮に体験を通して国家主義的な神に感応し、たとえば戦争等への国家的な動員が神の自己実現への参入として肯定的に位置づけられたとしても、その神は理性によって批評不可能となる。以前の拙稿においては、綱島の思想は国家主義を完全に排除する構造をもたないかもしれないが、師である大西祝から受け継いだ批評精神によって、国家主義に陥らないよう絶えず反省する態度を身につけていたのではないかとひとまず推測した。

そこで本稿は、この推測を根拠づけるべく、信仰と理性の関係について、とりわけ宗教的事実に対して理性的な批評が取りうる立場についての綱島の思想を解明する。

論述は次の順序で行う。まず、論の前提となる2点を明らかにする。一つは、綱島が

¹ 綱島梁川の記述については、複製版の『梁川全集』全10巻、別巻2巻（大空社、1995年）から引用し、（巻数：頁数）の形式で文中に引用箇所を示す。旧字体は新字体に改め、一部の表記を変更した。強調はすべて綱島による。〔 〕内は論者の補足である。

² 「明治宗教・倫理思想における綱島梁川の「個人人格」の意義」、宗教倫理学会編『宗教と倫理』第17号、2017年、44～58頁。

当時の日本主義や日本的キリスト教の思想に対して取る態度、もう一つは、思索の基盤を変容させるほどの宗教体験を綱島が得た時期である。私見では、3度の「見神の実験」はたしかに綱島の思想を大きく変容させたが、この「見神の実験」以前に思索の基盤を大きく変容させる体験を綱島は得ていた。本稿ではこの時期を、手記「寸光集」を執筆し始めた1903年7月ごろと考える。「寸光集」以前の綱島の思想は、無限の神的存在を求める宗教的要求が理性では批判できない真実性をもつことを基盤としていたのに対し、「寸光集」以後の思想は、綱島が実際に被った宗教体験や体験を通して得た真理を基礎に据えているのである（第2節）。

その上で、「寸光集」以前の綱島の宗教思想における信仰と理性的批評との関係を、論考「迷信とは何ぞや（宗教の中心問題を論ず）」（1902年11月）における綱島の宗教的符号（シンボル）および立法的理性に関する議論の分析によって解明する（第3節）。そして、「寸光集」以前の立法的理性の概念が、位置づけを大きく変えながらも、「寸光集」以後の思想でも重要な位置を占めることを示す（第4節）。最後に、綱島の「神之国」の概念を参照しながら、最晩年の綱島も理性的批評によって既存の国家や日本に対して距離を取りえたことを示す（第5節）。

2. 綱島における日本主義と宗教体験

綱島は1902年ごろから宗教に関する論考を精力的に雑誌に公表するようになったが、実は1898年から少しずつ宗教論を発表している。さらにたどれば、手記では1896年後半から既に宗教に関する思索を展開している。東京専門学校文科に入学（1892年）して哲学・倫理学を研究し、卒業（1895年）後は文芸や美術の批評なども公表していた綱島は、1896年4月に結核に罹患し、同年7月から神戸諏訪山吉田病院で療養する。このとき、副院長であるキリスト者、橋本善次郎と深く交わり、また神戸教会の海老名弾正（1856～1937）を訪れる中で、宗教に対する関心が深まってくる。綱島は高梁教会（岡山県高梁市）で10代のころにキリスト教の洗礼を受けたが、大学で学ぶ中で信仰に対して懐疑的になっていたのである。

さて、海老名弾正といえば、日本的キリスト教を唱道していた人物でもある。綱島は海老名を「基督教界錚々の名士なり」、「その人物の偉大なる所を見て益々景慕の念をおこしぬ」（6:90-91）と評価している。綱島は海老名から強い影響を受けて宗教に関する思索を開始したものと思われる。1896年9月より書かれた手記「所思断片」（6:87-132）

では、それまでの手記にはみられなかった宗教や宗教哲学に関する考察が目に見えて増える。この手記には海老名の説話のまとめが2箇所(6:91-95、116-121)で記されており、手記の約4分の1を占めている。綱島のまとめでは、たとえば日本の歴史的発達とこの発達の中で現れた神を研究し、日本の国情、国粹に融和した日本的基督教を発展させることが重要であり、キリスト教のうちに忠孝の概念や国家的観念を発展させることが日本の天職だ、と海老名が語ったことが記録されている(6:91-94)。

綱島はこのような海老名の思索をどのように受けとめたのだろうか。また、当時の日本主義の思潮に対していかなる態度を取ったのだろうか。この手記には海老名の説話のまとめは書かれているのだが、綱島の意見や説は記されていない。ただ、1898年ごろの綱島の公刊論文を見る限り、綱島は既存の日本主義を批判しつつも、国民の活動の源泉となるような真の日本主義的宗教の登場を望んでもいたのである。

たしかに綱島は浅薄な日本主義に辛辣な批評を加えていた。1898年7月に公表した「国家主義に関して木村鷹太郎氏に質す」において、大西祝の批評主義を受け継ぐかのような執拗さで木村鷹太郎(1870～1931)の『日本主義国教論』の思想的な一貫性のなさを暴き立てており、日本主義の思潮からは距離を取っているようにみえる。また、綱島は同年2月に公表した「我邦現今の宗教界の形勢」において、仏教・キリスト教が「我が明治の新国民的生活に編み込まれて其が活動の太源たるには至らざる」という認識を示した上で、このような要求の一部を充たそうとして出てきたのが「日本主義一派の運動」だと捉えている。ただ、この運動は「功利主義に立脚して国家神聖に^(わい)倣したる一派の運動」であり、この一派に「熱誠なく、理想なく、法器なき」ことに綱島は失望している(4:418)。このように、日本主義の思想に対して綱島は否定的な態度を取っている。

ただし綱島は、「功利主義に立脚して」いる点や思想的な一貫性のなさから既存の日本主義を批判しているのであって、日本主義あるいは日本というナショナルアイデンティティが「明治の新国民的生活」における「活動の太源」となること自体を否定してはいない。むしろ先の引用にもあるように、綱島は、「明治の新国民的生活」における「活動の太源」となる仏教、キリスト教が出てくることを望んでいるのである。現状の仏教は日本に古くから根付いているからこそ「制度信條に附著せる弊害」が多く、そのために根本的な改革運動ができない。また、キリスト教は「制度信條の弊」は割合少ないが、勢力が小さいため「国民の元気」となるには至らない(4:417-418)。そこで綱島は、仏

教では、暹羅（タイ）から印度に渡る青年仏教徒による大乘仏教の刷新に期待を寄せ、キリスト教では、日本的キリスト教を唱道する一部教徒や、青年学徒と交わって宗教的・道徳的品性の修養に勉める海老名弾正、松村介石（1859~1939）に注目している（4:416-417）。このように、綱島は日本の国情に合う形で根本的に改革され、「国民の元気」となる宗教の登場を望んでおり、そのような宗教の可能性の一つが日本的キリスト教だったのである。

1899年5月23日の海老名宛の書簡においては、「基督教を（勿論其フォームを）めちやめちやに粉^{〔ふんせい〕}壟し日本的意識の根柢に其精神を植ゑ更へざるべからずと存候 かくして此意識の深根柢より新に生長し来たる基督教こそ strict sense にての日本基督教と存候 我等は所謂日本主義に与みする能はず候へども彼等よりも或意味に於て一層深き且博大なる日本主義を唱ふるの要あるを見申候 此点に於て小生は根本的に先生の主張に賛成致者に御座候」（9:63）と述べている。綱島はキリスト教をその「精神」と「フォーム」に分類する。この「フォーム」は、1902年のシンボル論（後述）を遡って援用することが許されるならば、儀礼だけでなく、「造物主」としての神などの教義の内容も含み、理性によって批評されうるものである。そして、この「フォーム」とは別にキリスト教の根本的な「精神」を設定し、その「精神」を「日本的意識の根柢に植ゑ更へ」ようとする海老名の「日本基督教」に綱島は賛同する。日本主義よりも「一層深き且博大なる日本主義」と綱島が考えるものの詳細は不明であるが、海老名の「日本基督教」に賛同しうるものようである。

しかし、綱島は単純に海老名に賛同しているわけではない。上記の引用に続けて次のように述べている。「嗚呼先生よ願くは我が宗教界の爲めに自重せよ 願はくは我宗教家をして文学美術社会道徳の諸方面より深く我故国を自識し故国を重じ故国に同情せしむるの一念に燃えしめんことを」（9:63）。綱島は海老名に、宗教だけでなく「文学美術社会道徳」の諸方面から故国日本を捉えることで、「日本基督教」を一層深めることを求める。1899年の綱島は、宗教以外の諸方面の理解が乏しい点で海老名を批判的に捉えてもいたのである。

なお、綱島が本格的に宗教論を展開する1902年以降、海老名や日本的キリスト教にあまり言及しなくなるが、海老名との親交は続き、綱島が亡くなる2ヵ月前にも書簡のやり取りがあった（9:569）。なにより、綱島の葬儀は綱島の希望で海老名の司式によって執り行われた。最晩年の綱島と海老名との関係については別途検討する必要がある。

*

次に綱島が宗教体験を得た時期について考える。綱島は論考「予が見神の実験」において、1904年の7月、9月、11月に3度経験した宗教的な体験が決定的なものであったことを語っているが、彼はそれ以前から何らかの体験を有しており、その体験をもとに思想を語っていた。たとえば、1904年6月3日の魚住影雄（1883~1910）宛書簡においても「我儕の敬虔魂が「汝は我れ也我が愛子也」てふ神の声を聴きたる刹那には（少なくとも小生自家の実験よりいへば）……我儕が現実のまゝに神の生命に分け入り（臆ろげながらに）神の大意識に参したるものにあらずや」（9:201）という形で、自分の宗教体験に基づいて思想を語っている。このような語りがいつから始まったのかを明確に確定することは容易なことではない。たとえば、1903年8月の森脇忠市宛書簡における「小生の実験を申候へば病苦に打ち勝つる道は唯々宗教上の信仰より外に無之平素の信念強く確立すればするほど病苦の荷も軽くなり候やう経験致候」（9:171）という記述の「実験」が宗教体験と言えるのか、それとも単なる闘病経験と捉えるべきかを確定することは難しい。そもそも、まだ神戸で療養中の綱島も、1897年2月13日の渋谷鴻南³宛書簡で既に「見神」に関して具体的に語っている。静かに天地の神を観想したときに、一大実在が意識に現前した。綱島は自らの卑小さを意識して神の前にひれ伏し、涙を流して祈るとともに、「一種の光明に充ち充ちたる我以上の我」となった感覚を得たという。綱島はこの経験を「不磨の実験的事実」と捉えている（9:32）。これらの表現は「予が見神の実験」の「堂々と現前せる大いなる靈的活物とはたと行き会ひたる」や「我が我ならぬ我と相成」（5:213）という記述とも重なり、「見神の実験」と同質の経験が1897年の段階で既に得られていたように見える。しかし、1901年10月6日の書簡（東京専門学校関係者の島村瀧太郎、中島半次郎、後藤寅之助、五十嵐力、紀淑雄、中桐確太郎宛）では、「見神」について「神は到底如実に見るを容さざるものかと存ぜられ候 此は自我を全然超越し尽くし能はざるを本性とする吾等の先天の運命と存候」（9:101）と述べる。1901年の段階では「見神の実験」と同じレベルで神を「見」ていないのである。

³ 五十嵐力編『渋谷鴻南遺稿』（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/903386>、1901年、非売品）によれば、渋谷は1873年（綱島と同年）に埼玉県で生まれ、綱島とほぼ同時期に東京専門学校文科に入学し、卒業する。1898年4月に咯血し、1899年6月21日に亡くなる。享年27歳。先に結核に罹患した綱島は渋谷と書簡を交わし、さまざまな助言を与えた。

このように、綱島の体験の深化はたどりにくいですが、本稿では手記「寸光集」が執筆された1903年7月ごろに自らの思索の語り方を変容させるような体験の深化が生じたと考えられる。というのも、この手記の冒頭には次のような端書きがあるのである。

敷演せず、潤色せず、我が心上を寸雲のごとく掠めて走れる諸念、而かも我が信念の影、若しくは理想の影として、恩寵の匂ひ忘れがたきたぐひのいろいろを、さながらに写しとどめたるが故に、仮りに之れを寸光集とは名づけたり。

(此集にては出来るだけ平生の文字癖を蟬脱せむと期したり、されど殊更に文章に無頓着ならむとしたるにもあらず。)

明治三十六年七月 白熱子 (6:467)

この端書きにおいて、何らかの「恩寵」によって心上に来たる諸念を敷衍・潤色せずに写し留めたいという意志が記されている。「予が見神の実験」にも引き継がれる、このような体験の表現が可能になったのは、「恩寵」に相当する何らかの感応や体験がそれまでとは違ったレベルで具体的に得られたからだと思われる。また、「寸光集」以前の記述と比べると、「寸光集」以降では「実験」概念を重要な場面で多用しており、さらに「寸光集」では、それまでの手記にはなかった体験のきわめて具体的な記述がなされている。以下のような具体的な記述は、管見の限り「寸光集」以前の手記や書簡にはみられない。

中宵枯坐、一種言ひがたき清き穏かなる、而かも深奥なる喜びの我が心を充たして、所謂祝福の感とは此くの如きを指せるものかと、そゞろに想ふことあり。かゝるをりは我が世淋しからず、孤寂ならず、一種の神恩ともいふべきもの我が衷に靈動せるを覚えて、聖なる帰依のこゝろ溢れて^(とど)禁むる能はず。我れ、このごろは、この経験に遭ふこと二たび三たびにして、靈性の底、明かに触発の意識ありて、油然として感謝の念に堪へず。この貴き純なる一種のよろこびは、恰も温かなる光の如く、我が枯槁せる^(こころ)靈魂を活かし育つる力を有す、こは抹す可らざる事実なり。而かも之れを筆もて写し出ださむとするには、余りに細かなる聖光の影なり、匂あり。

(6:483)

「寸光集」の執筆以前にも何らかの体験は得られていたと思われるが、「寸光集」の時期からは、体験を潤色せずに写し留めることの必然性を感じるほどに、体験が深まっていたものと推察できる。しかも「貴き純なる一種のよろこび」という語には「自覚の手もて掬はむとすれば、早くも消えて痕なき一種の幽かなる法喜法悦也。「我れに心情の光あり、之れを理性に移さむとすれば忽ち消ゆ」るもの」(6:484)と注が附され、体験が理性によって捉えがたいものであることが強調されている。

また、綱島は自らの宗教的感応を事実として捉え、この事実を根拠に書簡に回答している。公刊された論考「答道友書」(1903年7月)では、書簡に対する返信という形で次のように論じられている。「宗教的要求は実証もしくは感応其事とは別ならずやとの御疑念、一応はさる事ながら、小生は要求と感応とを全く別の事とは存せず、自分の経験によれば、醇なる沈痛なる宗教的要求あれば、感応は自づと其中に含まれ来るやう存ぜられ候」(5:43-44)。これらのことから、本稿では「寸光集」の執筆開始を境に、綱島が宗教体験で得た宗教的確証を基に思想を形成し始めた捉え、次節以降、「寸光集」前後における信仰と理性的批評との関係についての思想の変化を分析していく。

3. 「迷信とは何ぞや」における信仰と理性的批評

本節では、「寸光集」以前のある程度まとまった宗教論、「迷信とは何ぞや(宗教の中心問題を論ず)」(1902年11月刊行)を取り上げる。この論考は1898年11月に公表された小論「信仰と理性(宗教の本質は何ぞ)」(4:419-426)の続編である。この小論では、理性の領域と、感情や意志に関わる宗教や倫理の領域とを独立したものと捉え、情意より発する「人心内部の要求」(4:423)に信仰の根拠を求めた。しかし、理性と信仰が全く没交渉というわけではない。そこで綱島は「迷信とは何ぞや」において両者の関係性の解明を試みた。

綱島は、崇拜対象の観念に論点を絞って迷信を論じ、崇拜対象に対する「迷信の有無多少は、倫理的と論理的との二方面」(4:435)から評価できるとする。たとえば、人身御供を好む神や、争闘し嫉妬する擬人的な多神よりも、綱島の生きた時代の道徳的意識と衝突しない倫理的な神の方が迷信的ではない。また、倫理的な神でも、当時の科学的知識と衝突する神、たとえば「萬有の超絶的創造主と見らるゝ」神や「未来世において賞罰禍福の手を下だす神」には、「専ら思想の矛盾則と理由則とに従ふ論理的理性」が矛盾を感じる(4:434)。

とはいえ、綱島は非倫理的で非合理的な信仰を迷信として排すべきとは論じないし、迷信的なものを取り去った倫理的かつ合理的な理想そのものを崇拜対象とすべきだとも論じない。宗教は知の活動だけでなく、情意の活動でもあり、宗教の根本には神秘的な生命に触れることを希求する宗教的な要求や感情がある。この神秘的な生命は理性的批評の届かないものであるため、非合理と断ずることもできないものである。

このような理性と情意との関係を、綱島は符号（シンボル）、写象（Vorstellung）の概念で論じる。神のような宗教的な対象を表現するには理性の批評を超えた「一種富贍の生命的意義を荷へる詩的、具象的符号を用ひざるを得」（4:439）ない。人間は符号を通してしか宗教的事実に到達できないが、符号によって符号以上のものに触れうるのである。このような宗教的符号に、綱島は二つの側面を認める。一つは、論理的理性による知的で概念的な理解の側面、もう一つは宗教的要求に根ざした感情的表現の側面である。

綱島によれば、写象は概念的に把握される知識の所産であるが、とりわけ「宗教的写象は、畢竟宗教的感情に依りて賦采せられたる写象なり把住」であり、その根柢には「吾人が神を豊贍無限の生命と観ずる根本要求の造り出だす直観」（同）がある。とはいえ、神が知的な理解を超えていて、感情において求められ直観されるものであるとしても、人間は「造物主」のような知的理解を含んだ符号によってはじめて宗教的事実を表現でき、理解できる。宗教的写象は、写象本来の知的な側面と情意の側面両方によって形成されるのである。「宗教的真理の性質」（1902年1月）の表現で言えば、非理性的に神を感じた上で、その「神と自己との恒久の関係を定むる」（5:12）のが理性の力なのである。

そして、たとえば人格性、非人格性、造物主などの神の属性、人身供犠などの神の崇拜の仕方など、知的に理解しうる宗教的符号の側面を「符号の形式」（6:376）と綱島は捉える。この「符号の形式」はその時代の哲学や科学などの知見に基づいて理性的に批評しうる。たとえば「造物主」として知的に理解された神の属性は科学的な知見などに基づいて迷信と捉えうる。しかし、その符号を通して感応する生命そのものは理性の批評を超えた事実とされる。綱島は手記において「鰯の頭」への信心の例を挙げ、「鰯の頭」であっても「真に之れを信仰すれば一種の神の感応あるべきは疑ひを須ゐず」（同）と述べている。「鰯の頭」への信仰は、合理的でも倫理的でもないため綱島の基準では迷信的だが、迷信的と捉えうる形式の符号であっても、真摯な宗教的要求をもつ者がこの符号を通して神秘的な生命に触れ得たのであれば、その生命に触れた事実は理性によって否定しえないのである。

さらに綱島は、宗教的符号を形成する理性と情意とは対立的な関係になく、むしろ両者が協働して宗教的符号を進歩させていくと考える。

神を表象する符号は、一面には吾人の宗教的感情の進歩、他面には科学的、哲学的世界観の進歩と共に、限りなく批評せられ、破壊せられつゝ形を更へゆくべくして、而かもそれが滅尽に帰すること終にあるべからず。符号の一面は、即て神の生命を盛る器なるが故也。一代には、自づから一代の文明と併行する神の符号観あるべく、又実にあるべき筈なり。吾人は断えず符号の不完全の一面を発見して之れを破壊しゆくと共に、更に富贍なる新符号を創造し、若しくは其の意義を醇化浄化して新しき神生命を写象せずんば已まざるべし。之れを吾人の宗教的要求とす。

(4:440)

真摯な宗教的要求が、自らの宗教的事実を一層十全に写象しうる符号を創造しようとする理性的批評の原動力となり、宗教的符号の形式は、宗教的感情および科学的哲学的世界観によって絶えず「批評」され、更新される。綱島はこのような批評的営為による符号の進歩を以下の3段階で捉えている。「神を火とし太陽とする如きは最も幼稚なる符号観の段階にして、喜怒哀楽を有する自然人をもて神に擬するは其の第二段、而して吾人の道徳的理想をもて神を符号化するは最も進歩したる最後の段階也」(4:446)。もちろん、「幼稚なる」符号も、批評不可能な宗教的事実を写象する器である以上、端的に否定されるべきものではない。

このような理性と情意の協働による宗教的符号の進歩を可能にしているものは何であろうか。それは、符号の形式を批評する論理的理性と情意とを包括する「直覚的、立法的」な理性である。綱島は「自家が不可解とする信仰上の事を一排し去らずして、むしろ、それが人心の一位置を占むべき正当の権利を認取して、之れに是認の印を捺」することに「理性の誇るべき最高の權威」を認める(4:442)。つまりこの理性は、論理的理性が批評しうる範囲を超えたことには信仰や宗教的事実に譲歩することが正当だと判断し、知情意を含めた「吾人全人の宗教的、人生的理想其者をも附与する直覚的、立法的意義を有す」(同)るのである。

このような立法的理性が、人格的な神を崇拝することの正当性を保証することになる。

綱島は人格的な宗教的符号が必要不可欠なものだと捉えて、井上哲次郎の人格神批判に反論して人格神の重要性を主張する。綱島は、古来より宗教上の迷信が神の人格視や偶像視によって生じたことは認めつつも、人格視には一層深い意義があると捉える。「神の人格的符号化」は「抜くべからざる人心の要求」(4:446)であり、「一種何等かの人格的符号(敢て人格そのものといはざるまでも)を以てするにあらざれば、無限者と接するの道なき先天の約束を有する」(4:444)のである。綱島によれば、人間には「光明、真理、生命、道、正義、仁愛などいふ属性」、つまり知的に理解される抽象的な「吾人の倫理的理想」それ自体を渴仰の対象と信仰することは困難である。禅は倫理的理想を知的に悟ろうとするが、宗教的な信仰は情意も含めた全人的な営みであり、その根本には各人の宗教的要求が存している。そして、抽象的な理想の実現を情意のレベルで求める人間には、抽象的な理想を担った人格的な存在との感応道交が必要不可欠になる。そのため綱島は、抽象的な理想を人格的な「渴仰の対象に附する」という「人格的符号化」が「人心不拔の要求」だと考えるのである(4:446)。

この議論に対し、そのような神は道徳的理想を人格神に投影したものに過ぎず、一種の迷信と言えるのではないか、という批判が想定しうる。綱島は、たしかに神の概念は人間の理想を投影した主観的な産物に過ぎないが、だからといってその神が空想や迷信だと即断してはならない、と応じる。根源的な宗教的要求をもつ者が理想を投影して造り出す人格神は、空想以上のもの、「無限の權威を帯びて吾人に^(のぞ)蒞む實在」(4:449)となり、「自ら^き迫り出だしたる神は、即ち自ら則る神」(4:450)となる。人間は、主観において造り出した神に、論理的理性によっては否定することのできない實在性を認め、その神に服従して自らの言動を律しうる。このようなことを可能にするのが立法的な理性である。立法的な理性は、論理的理性と情意を協調させて全人的な理想を造り出し、その理想によって自らを律する。この思想には明らかにカントの実践理性を変奏したものといえるだろう。

以上の議論から次のように「寸光集」以前の綱島の宗教論を理解することができよう。綱島は論理的理性と情意とをひとまず区分し、儀礼や教義などの「符号の形式」は論理的理性の批評によって進化するものとしつつ、情意に根ざした宗教的要求やその要求を通して到達しうる宗教的事実については論理的理性の批評を越えたものと捉えた。しかしこの二者は立法的な理性の下で協働する。根源的な宗教的要求に基づいて人間は道徳的理想としての神を主観的に創造し、しかもその神に實在性や權威を認めて服従する。

また、時代の科学的哲学的な知識の向上にあわせて「符号の形式」が更新されていくことによって、情意における信仰もまた深まっていくのである。

さて、ここで本稿の関心に立ち戻るならば、綱島にとって、日本主義も、キリスト教をはじめとする諸宗教の教義も、論理的理性による批評が可能な「符号の形式」となるだろう。まずもって論理的理性によって批評不可能な宗教的要求や宗教的事実があり、それらを一層十全に表現できる「符号の形式」が論理的理性によって探究され続けるのである。綱島はキリスト教や仏教（特に禅）、儒教の内容、あるいは井上哲次郎の人格神批判を批判的に検討する考察などを論文や手記のなかで書き続けるが、このような営みもよりよい「符号の形式」を探究する理性的批評の試みとして捉えうる。それに対して、日本主義や日本的キリスト教については1902年以降にはほとんど言及されなくなる。推測に過ぎないが、日本的キリスト教は綱島にとって、合理性や倫理的な自律性の観点から符号の形式の発展段階の低いものとみなされて、批評の対象にならなくなっていったのかもしれない。そして「国民の元気」となりうる「一層深き且博大なる日本主義」は、次節以降で示すように「国民」や「日本」という枠組みに囚われない宗教体験を基盤にして追究されていくように思われる。

4. 見神と批評

さて、「寸光集」以前の理性と信仰との関係についての綱島の発想は、「寸光集」以降に変化したのだろうか。もちろん、綱島の言説は大きく変化した。「寸光集」以降、宗教的実在は主観的に創造したシンボルに認めるものではなく、直接感応しうるものとなり、実在的な神とその神への感応が思索の基盤に据えられた。神との共在が単なる理論ではなく宗教的事実となったからこそ、見神の内実を如実に語ろうとする「予が見神の実験」の論述形式が可能になったのである。綱島は、「父よ」と神に呼びかけるキリストと神との父子関係を借用し、「神子の自覚」という符号の形式で自らの宗教的事実を表現する。しかも、最晩年の綱島は浄土教とキリスト教に「神子の自覚」をもっともよく表現している「神子教」という共通点を見出して、キリスト教の祈りや浄土教の念仏を実践しながら、両宗教の思想内容を用いて自らの宗教的事実を表現していく（この点については別稿にて論じる予定）。「寸光集」以前から、信仰や宗教体験が理性による批評を超えていることは何度も論じられていたが、「寸光集」以降は一層強調されるようになり、理性の役割が肯定的に語られる箇所は少なくなる。

それにもかかわらず、立法的理性の役割を認める綱島の記述が遺されていることも事実である。この記述を中心に綱島の宗教思想を捉え返すならば、上記のような綱島の宗教的事実の表現も、理性による「符号の形式」への批評として捉えられる。

当該の記述は綱島の死の2ヵ月前に書かれた「宗教上の理屈」の意義に関するものである。綱島によれば、「宗教上の理屈」には2種類ある。一つは「純乎たる知力上の興味より、種々の神学的概念の道の論理的関係を辿ることのみ耽る学究者流の理屈三昧」(6:710)である。論理的理性による符号の形式の批評はこのような煩瑣無用な「知力的遊戯」(同)の側面を含むだろう。しかし、もう一つの「宗教上の理屈」がある。それは、「宗教上の実験を材料とし、根拠として、これに合理的説明、もしくは^{デヤステフィケーション}是認^{さな}を与へんとするものにして、吾人の実験を、^{さながら}如実に理性上の言葉に移して言ひ表はさんとする、切実なる理性の要求に出づるもの」(6:711)である。綱島は「宗教上の実験」には「信仰の論理」が内在し、その論理を「理性の要求に合ふ一種の統一的、組織的説明」によって語ることが「吾人の理性(実践的理性)の抜きがたき一要求にして、信仰上、常に排斥するの要なきのみならず、寧ろ信仰をして堅実ならしめ、全人上の事ならしむる一要素」(6:712)だと捉える。

先に論じたように、「寸光集」以前の綱島は、宗教的な符号の形式の理性的な批判と、宗教的要求に基づく信仰とを協調させる立法的理性を想定し、論理的理性では解し得ない信仰上の事実に正当な位置を与え「是認」するのが「理性の誇るべき最高の權威」と捉えていた(4:442)。図式的に言えば、論理的理性と情意とを統括する位置に立法的理性を置いていた。それに対し、最晩年の綱島は、まず「宗教上の実験」を前提し、この実験の下で、実験に合理的、理性的説明を与えて「是認」しようとする実践的理性の要求と、情意による宗教的信仰や実践とが協働して全人的で堅実な信仰が形成されていくと捉える。実践的理性の要求が、カントの言う純粹実践理性の要請にあたるものなのか、情意による宗教的要求と並ぶ要求をもつことを理性にも認めるものなのかは不明である。ともかく、論理的理性と立法的理性、情意における信仰、そして宗教的実験の位置づけが、宗教体験を得たことで大きく変化したが、立法的理性には依然として重要な役割が与えられている。

このような図式で綱島の思想の変化を理解したとき、最晩年の綱島において論理的理性と実践的理性がどのような関係にあるのかが重要な問題となろう。ただ、管見の限り綱島はこの二者の関係を十分論じてはいない。少なくとも言えることは、綱島は論理的

理性の批評を単純に「知力的遊戯」と切り捨てているわけではないということである。1907年3月19日付の松本悟朗宛書簡では、宗教的実験の中心が「情意を以て感得し証味する価値観の上にあるが故に此の〔情意の〕方面の事は理性の交渉を越し批評を絶する」と主張しているが、「信仰と理性との調和問題」については「寸光集」以前の論考「信仰と理性」「迷信とは何ぞや」を参照せよと述べ、「宗教的実験てふものの中にも知識的要素の存在するは否むべからざる事実なれば此方面に関しては常に理性を交渉せしめて以て其の不合理を去つて迷信に墮せしめざるやう注意すべきは当然」(9:518)とも述べており、論理的理性による宗教的符号の形式の批評は必要だと捉えている。よりよい符号の形式を求めてキリスト教や仏教(特に浄土教)の思想に理性的批評を加えることと、実践的理性の要求にしたがって宗教上の実験に統一的説明を与え、実験を是認することとは深く連関すると思われるが、綱島はこの連関を解明しきれなかった。また、「実践的理性」と情意との関係はさらに明晰にされるべきであるが、綱島の短い生涯のなかでそれは実現しなかった。

5. 神之国と日本

以上の内容を踏まえて国家主義に対する綱島の態度を考えるために、先に紹介した書簡における松本悟朗のもう一つの質問、「神道と人道との関係問題」に対する綱島の回答に触れたい。おそらく松本の質問は、宗教が一切の物事の差別を排して平等を志向するが、国家は一種の差別と捉えうるので、国家と宗教は対立するのではないか、というものであろう。綱島は、宗教は宗教としての活動範囲をもつが、差別的国家的生活と並存しようと主張する。「宗教は国家の革命運動や政治上の制度組織などの事柄に関してはむしろ交渉薄く、其本領は個々人の心霊界の開拓にある也 吾等の心裡に神国を建設するにある也」(9:520)。宗教は政治機構とはあまり関わらず、個々人の心霊のうちに神国を形成することをその本領としている。しかし、綱島は宗教が政治に無関係であるべきだとも考えない。「宗教は政治的機関とは直接の関係なけれども之れに宗教的精神を吹き込みて之れを神意実行の道具たらしむる点に立派な交渉点を有す」(9:521)るのである。このような宗教と世俗の捉え方は珍しくはないが、重要なのは「神意実行」したときに形成される「神国」の内実である。

「断光録」(1906年3月)において綱島は「神之国」について次のように論じている。

「真に「神の子」の自覚を有するもの二人以上集まる所、そこに真の意味の社会あり、国家あり。之れを称して「天国」といひ、「神之国」といふ」(5:300)。つまり「神之国」とは、神と共在する「神の子」としての自覚を有する者たちが拡張していく共同性のことであり、神が実現する絶対的な理想としての世界のことではない（最終的、究極的には後者の世界に一致するとしても）。また、「神之国」の基盤は共通の自覚を共有する諸個人であって、既存の国や政治体制ではない。したがって、政治的機構に宗教的精神を吹き込むといっても、吹き込むべき日本の政治体制が前提されているのではなく、むしろ宗教的な感応や神の子としての自覚を共有する個人を政治的機関の中も含めて増やしていき、「神の子」らが理想的な共同体や政治体制を実現していく、ということになるろう。

「寸光集」以降の綱島は「日本」にあまり言及しないため、綱島の「日本」の捉え方は分析しにくい。ただ、晩年の綱島にとって「日本」という「符号の形式」は大きな思想的課題にはならなかったと言える。宗教体験に基づいて「神子の自覚」をもった者たちが日本において形成していく共同性にとって本質的なものは「神子の自覚」であって「日本」ではない。そして、宗教体験から得たものを自らのうちで深めたり他者に伝えるために綱島が用いた「符号の形式」は、浄土真宗、キリスト教、西洋哲学、儒教など、「日本」に囚われない多様な思想であった。「寸光集」以降の綱島が仮に「一層深き且博大なる日本主義」を重視していたとしても、それは日本的なものの精髓を思想の根本に据えるものではなく、宗教的な体験に基づき、その体験に是認を与える実践的理性の要求に何らかの仕方で促されて、日本に囚われることのない「符号の形式」を探究し続ける批評的な試みであり、そうであるからこそ日本に住む人々のうちに真の共同性を打ち立てるものなのである。

付記：本稿は、科学研究費補助金（課題番号 20K12819）および龍谷大学国際社会文化研究所（2018年度個人研究）の助成を受けた研究成果の一部である。

キーワード:

綱島梁川、宗教体験、批評、シンボル

Keywords:

Tsunashima Ryōsen, religious experience, critique, symbol